

# 『都留に来て本当に良かった！ 市民の「温かさ」こそ大切な財産』

国文学科3年 三國大輔

学生生活も三年目を迎え、改めて文大に入学できた幸せを思う今日このごろです。最近、その幸せの源（エネルギー）は、市民の皆さんからいただいているものではないかと感じるようになりました。

私は大学では新聞部に所属し、「都留文新聞」を発行しています。取材を兼ねて、つる子どもまつり（以下、子まつり）には三年間参加

させていただきました。事前、事後の実行委員会などにお邪魔していつも思うのは、市民の皆さんは私たち文大生の活動を温かく支えてくださっているのだということです。活動の核となる部分を大学生に譲り、あとは長年の経験から子どもたちの様子について助言してくださったり、事務など裏方の補助に回ってくださったりする皆さんの姿から、文大生にとって都留市の皆さんは、まさに「お父さん」「お母さん」といった存在なのではないかと思つたのでした。私たちに對して、深い歩み寄りをみせてくださる皆さんとの出会いがある子まつりに参加するのが、毎年とても楽しみです。

こうした体験の場に巡り合うことが出来る私たちも幸せですが、それ以上に幸せなのは子まつりに

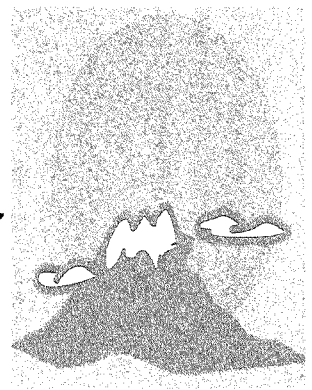
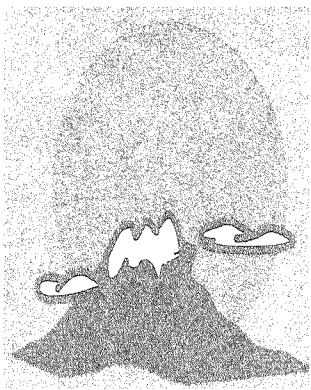


参加できる都留市の子どもたちだろうと思います。子どもたちに「出会い」の場を、と働き掛ける市民の方々の努力あってこそそのものだと思います。子まつりが「つるの宝」と称される意味とその重みを感じます。

子まつりのことも含めて、都留市は本当に文化色の強い町だなあと、入学したての時から感じています。人口三万人の町に、合唱団体がおよそ二十も存在するということを知ったとき、本当に驚きました。

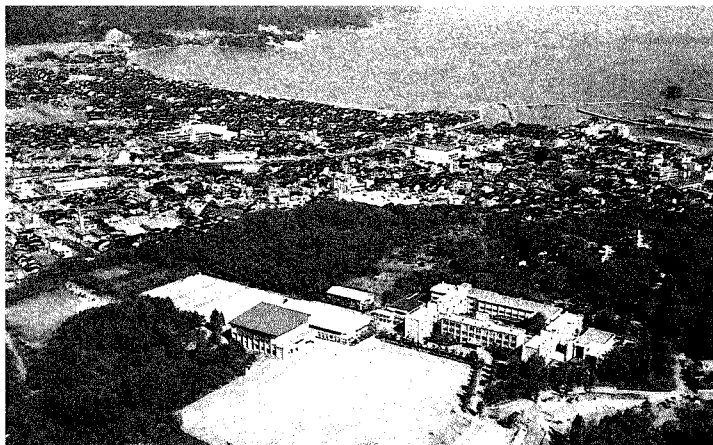
都留の街について要望があるとすれば：、最初に感じたのは、道路の幅を広くしてほしいということ。歩道などない狭い国道に、いつ事故で死んでもおかしくないと思つたものでした。自転車で移動することの多い私など、い

## 文大生の故郷 都留



つもハラハラしながら運転しています。また、自転車の盗難の話がよく聞くことも気になります。先に記したような温もりのある街とは対照的な治安の悪さが残念に思われてなりません。

私の故郷は富山県氷見市です。人口六万人の静かな街で、都留市とよく似た雰囲気を持っているよ



母校から富山湾を一望する

うに思います。「氷見と都留、どっちが田舎？」などと聞かれると、返答に困ってしまいます。ですが、既に田舎慣れしてしまっている私にとって、都留市はとても住みやすく、氷見市も都留市も大好きです。

氷見市の売り文句は「魚とハンドボールの町」。本当に海がきれいな町です。富山湾から一望すること

のできる立山連峰は最高！その富山湾を利用し、古くから漁業が盛んで、冬になるとブリの大漁に市民が沸きます。海岸沿いには民宿が建ち並び、新鮮な魚料理を楽しみに、各地からお客さんがたくさんやってきます。皆さんもぜひいらしてください。また、氷見市はたいへんハンドボールが盛んで、

多くの小学校にハンドボールチームが設けられ、中学、高校、そして故郷を離れて大学で、また社会人として実業団に所属してハンドボールを続けていく人も少なくありません。母校の水見高校は、かつて団体のハンドボール競技で三連覇したこともあり、いまでもインターハイや国体で活躍しています。

大切な第二の故郷、都留市はこれからどう変わっていくのか。卒業して、都留を離れることもあり得る者にとっても、その関心はたいへん高いものです。ですが、私としては、子どもや若者を大切にしてくださいと市民の方々の「温かさ」と、そんな皆さんによって成り立っている「文化」が、二十一世紀を迎えても今と変わらず存在していることが最も大きな願いです。設備投資や観光開発以上に大切な都留市の財産であるように私には思えるのです。